

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

1	SE	場面切り替え	
2	SE	衣擦れ/シーツを擦る音	
3	SE	鳥(スズメ/ムクドリ系)の鳴き声	
4	一ノ瀬	……	
5	一ノ瀬	「ん……」	
6	一ノ瀬	「朝……?」	
7	一ノ瀬	「えい……だ? イイ」	
8	一ノ瀬	「やうか。たしか山の中を彷徨つて……それで」	
9	SE	場面切り替え	
10	SE	食器音(カチャ系)	
11	一ノ瀬	結局何も分からぬままか	
12	一ノ瀬	昨日の記憶を頼りに壁の中を歩いてみたけれど、 「」がどこなのか知る手がかりは見つけられなかつた	
13	一ノ瀬	テレビとか新聞とか、 とにかくなにか情報を手に入れればと思つたけれど、 学生食堂だという「」にもその類のものは見当たらぬ	
14	一ノ瀬	学生のほとんどは寮住まいだといふし、 厳格な方針なのか、 それともむしむし誰も興味を示さないのか	

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

15	一ノ瀬	たしかにテレビや新聞が無くても不思議じやない。 実際自分の周囲でもそれらに興味を持つていてる人なんて……
16	一ノ瀬	人なんて……?
17	一ノ瀬	いま何か……
18	一ノ瀬	具体的には分からなけれど、何かがひつかつた
19	一ノ瀬	……だめだ。何かを思い出そうとすると霞がかかつたように頭の中が 真っ白になつて何も考えられなくなる
20	一ノ瀬	今は考えても仕方ない、か。
21	一ノ瀬	自分が誰なのかすらわからないんだ。 ショックじやないといえば嘘になるけれど、ソリもど何も分からないと むしろ諦観の方が強い
22	一ノ瀬	「スマホでもあればすぐわかるんだらうけどな……」
23	みちる	「すまほ~」
24	一ノ瀬	「うん。いくる海外つて言ひても ネットやえ見れればなんとかなりそなうな気が——」
25	一ノ瀬	「う~… うわ~!」
26	一ノ瀬	いつの間にやつてきたのか。傍らに女の子が立つていた
27	みちる	「うん? あ、隣借りるね」
28	SE	椅子を引く音
29	SE	食器音

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

30	一ノ瀬	一ノ瀬	白いブラウスに青いチェックのスカート。 緩やかな曲線を描いた胸元でリボンタイが揺れている。
31	一ノ瀬	一ノ瀬	「せい……ふく~」
32	一ノ瀬	一ノ瀬	それは学校の制服だった。 デザインは見たことのないもので、どこのものかは分からぬけれど、 昨日来てから初めての見慣れた光景に驚いて言葉が出ない。 そんなこちらの様子を見て、女の子はくすりと小さく笑みをこぼした
33	みちる	みちる	「くすり。なんだかまだ眠そうだね」
34	一ノ瀬	一ノ瀬	届託なく笑うその顔は窓から差し込んだ朝日を浴びて眩しいほどに輝いていた。聞きたい」とは山ほどあるはずなのに、どれも形なる」となく消えていく
35	みちる	みちる	「すまほつて、あの『スマホ』? もしかして持つてたりするの? あ、変な」と言つてたら、「めんね?」
36	一ノ瀬	一ノ瀬	「い、いや、大丈夫。そう、そのスマホ。 でも昨日から見当たらないんだ。 たぶんどこかに落としたんだと思つたけど」
37	みちる	みちる	「そつか……残念。キミ——転人生? 昨日先生に連れられてたよね?」
38	一ノ瀬	一ノ瀬	「先生?」
39	みちる	みちる	「うん。昨日の夜、弥彦先生と一緒に校舎の中とか、 学生寮回つてたでしょ?」
40	一ノ瀬	みちる	「弥彦先生つていうんだ。そういうえば名前聞いていなかつた」
41	みちる	みちる	「うーん、先生抜けてるといろあるからなあ。 『貴方は』とか、『私は』とかだけで場が成り立つちやう顔してるから。 色々曖昧になつちやうんだよね」

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

42	一ノ瀬	「顔の問題、なのかな……」
43	みちる	「顔と、あと空気？ あののほほんとした人畜無害ですって空気に最初はみんな騙されるんだ」
44	みちる	「でも怒らせると角が生えたみたいに怖いから気を付けてね。あの冷たい微笑みを浮かべたまま山積みの課題渡してくるんだから」
45	一ノ瀬	「そう、なんだ。たしかに、普段穏やかな先生ほど怒らせると怖いっていうのはよく聞くかもしれない」
46	みちる	「——あ、『めんね』の話ばかり。 えっと、私はみちる、織部（おりべ）みちるだよ。あなたは？」
47	一ノ瀬	「僕？ そいえば名前……」
48	一ノ瀬	自分が何者なのか。どうして「」にいるのか。 曖昧な記憶は靄（もや）がかかつたみたいにはつきりしない。 だけど不思議と、それだけは自然と口が動いてくれた
49	一ノ瀬	「僕は一ノ瀬（いちのせ）。一ノ瀬拓斗（たくと）だよ」
50	みちる	「一ノ瀬君かー。じゃあ——タク、だね」
51	一ノ瀬	「そこなの？」
52	みちる	「うん、よろしくね、タク」
53	一ノ瀬	織部さんは再び満面の笑みを咲かせる。 いきなりあだ名をつけられてしまつた。 けど、そう口にした織部さんのなぜだか嬉しそうな様子を見ると なんだかたたず気にはなれない
54	一ノ瀬	「あ、うん。よろしくお願いします。織部、さん」

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

55	みちる	「あーわざとしょ、そんな呼び方。 みちる、でいいよ。たぶん同じ年くらいだよね」
56	一ノ瀬	「いやでも——分かったよ。えいと、みちる、やべ」
57	みちる	「まーだなんか堅いな。まあ、おいおい慣れていけばいいよね」
58		
59	みちる	「それでタクはいれかひいつすの?」
60	一ノ瀬	「えーするつて言われても——弥彦、先生に呼ばれているけれど 好きな時間に来ていいつて話だつたし」
61	みちる	「そう、なんだ。じゃあさ、私が案内してあげよっか? トリウイウム、初めてなんでしょう?」
62	一ノ瀬	「ふふの?」
63	みちる	「うん。わしゆく私も見て回のうと思つていたといのだから。ほい」
64	SE	鍵束
65	一ノ瀬	「鍵? ザいぶん多いけど」
66	みちる	「これはね、トリウイウムの教室全部の鍵なんだよ。 これがあればどにでも……まあ、一部は除くんだけ——とにかく、 色々なところに入り放題つてわけ」
67	みちる	「あ、もちろん勝手に盗つて(といつ)きたわけじゃないよ。 先生に今日一日だけつて特別に借りてきたんだ」
68	一ノ瀬	「ああ、それで」
69	一ノ瀬	「みちるさん……みちるが僕のところに来た理由が分かった気がするよ」

異世界授業 トラック 2 「向日葵の少女」

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

85	一ノ瀬	「それより早く行こう。実は結構楽しみなんだ」
86	みちる	「タクがそれでいいなら——うん、そうだね。任せて、新学期が始まる前にタクも一人で出歩けるようにならないといけないしね」
87	一ノ瀬	「子供じゃないんだけどな」
88	一ノ瀬	「とりあえず余計な心配をかけずに済んだみたいだ。でも、今は……」
89	一ノ瀬	記憶の片隅にひとかけらだけ残っている声。 あの時聞こえたのはみちるの？
90	一ノ瀬	いや、そんなはずは
91	一ノ瀬	でもさうしてだらう
92	一ノ瀬	みちると会うのは初めてなはずなのに、 前にもさうして話していたことがあったような
93	一ノ瀬	「ねえ、みちる」
94	みちる	「うん？ なに？」
95	一ノ瀬	返却口にトレイを返し、中庭へ出ようとしていたみちるの背中に 声をかける
96	一ノ瀬	「ああ、いや。やっぱり、なんでもない。大したじやないから」
97	みちる	「えー。そんな言われ方したら余計に気になっちゃうと思つけど?」
98	一ノ瀬	「……。前にも、みちるといんな風に話していたような、 そんな気がしたんだ。そんなはずないのに」
99	みちる	「タク……」

異世界授業トラック 2 「向日葵の少女」

100	みちる	「それってあれかな。これは運命の出会いだーってやつ。ひょっとして、私口説かれてる?」
101	一ノ瀬	「い、いやそんなのもうはい。『めん、忘れて』
102	みちる	「ふふ、『めん』めん。実は弥彦先生からも『忘れてたんだ。ちょっと記憶が混乱しているかもって』
103	一ノ瀬	「混乱、なのかな」
104	一ノ瀬	混乱というより、欠如、欠落している方が近い気がする。ある一点からふつりと途切れで真っ黒になつていて、
105	みちる	「でも大丈夫!」
106	みちる	「今は思い出せなくとも、何かの拍子に思い出せるかもしれないし、それに」
107	一ノ瀬	「それに?」
108	みちる	「タクと私は同学年だし。一緒に卒業するまで、私がタクを守つてあげるから!」
109	一ノ瀬	それはやつぱり、どいまでも明るい笑顔で。怖い!となんて何もない、そう思わせてくれるあたたかさがあつて
110	一ノ瀬	突き抜けるような青空の下、まっすぐに咲き満ちた向日葵のよつやかな眩しさに溢れていた
111	一ノ瀬	「うん? 同学年?」
112	みちる	「そうだよ。冬が過ぎて、春になつたら、キミもトリウイウムの一員!あれ、違つた? 弥彦先生がそう言つてたけど。」
113	一ノ瀬	「全く聞いていないというか、いきなり過ぎる? いやか……」

114

みちる

「くすっ、なんだ。でも私もとても良い、」  
「と思つたけれど、  
キミは、これからのことを考える必要があるけれど、  
それにはどうしても必要な」と――」

115

みちる

「何を知つていて、何を知らないか。

トリウイウムはそれを探すにはきっと一番だよ」

116

みちる

「キミが探すその道がどこにあるのか、私も一緒に探すから。だから――」

117

一ノ瀬

「ようこそトリウイウムへ。そう言って彼女は再び笑う。

中庭から流れ込む風は春がそう遠くないことを示していた